様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１４日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2008～2012
課題番号：20320068
研究課題名（和文）　生成語彙意味論に基づく語彙情報と事象構造の融合的研究
研究課題名（英文）　Toward an Integration of Lexical Information and Event Structure Based on the Generative Lexicon Theory

研究代表者
小野　尚之（ONO NAOYUKI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：50214185

研究成果の概要（和文）：本研究は、語彙意味論モデルと構文研究を基に語彙情報と事象構造の融合に関する日英語の比較対照研究を行うものである。中心課題は次の３つに集約される。
（1）生成語彙意味論によるレキシコン研究の推進。生成語彙意味論モデルのクオリア（語彙情報）が事象構造の解釈をどのように決定するかという問題の解決を目指す。
（2）言語における主観性（subjectivity）問題の解明。主観性が事象構造の解釈（例えば、心理状態述語など）にどのように影響するか。そして、構文選択にどのように影響するか。
（3）語彙化・文法化における語彙情報と構文の融合についての新たな提案。語彙情報が構文に融合しさらに文法化していく過程には、類型論的に捉えるべき普遍性があることを示す。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to explore the integration of lexical information with event structures on the basis of lexical semantic models and studies on grammatical constructions. There are three major issues to be dealt with in this project: (1) Promotion of studies on the lexicon within the framework of the Generative Lexicon Theory, where we aim to solve the problem of how qualia (lexical-semantic information) come to determine the interpretation of event structures, (2) Elucidation of the subjectivity in language; how subjectivity is related with the interpretation of event structures (of psychological predicates), and (3) New perspectives on lexicalization/grammaticalization with respect to the integration of lexcal information with event structures. We aim to show that some typological universals underlie the process of grammaticalization in which lexical information is integrated with event structures.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2012 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
総　計	9,900,000	2,970,000	12,870,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学、英語学
キーワード：　語彙・意味

１．研究開始当初の背景

小野を代表とする研究チーム（堀江、上原）がこれまで進めてきたプロジェクト『認知類型論による日英語の事象構造の研究』において、小野は日英語の結果構文の分析を進め、その成果をまとめたものを小野（編）『結果構文研究の新視点』（2007）として出版した。その中でこれまでの結果構文の研究を総括し、さらに新しいトレンドとして、動詞や述語の精緻な意味分析（すなわち、語彙情報の分析）と構文の統合的な研究が必要性が認識された。

さらに、研究動向として、語彙意味論と構文研究の全体的動向を見渡せば、本研究が提案する、語彙意味の精緻な分析と構文の言語類型的な特徴づけを連結するアイディアは、いくつかの研究の方向性と軌を一にものである。認知的なアプローチによる語彙意味論の研究は、最近の Croft and Cruse (2004)に見られる。そこでは語彙意味論の研究と構文研究が結びついている。また、コーパスに基づく語彙意味論は、Stubbs (2001)によって提案されている。また、自然言語の語彙をコンピュータによって処理可能な語彙情報として記述する研究が、オントロジー意味論（Nirenburg and Raskin 2004）として提案されている。認知的な語彙意味論とオントロジー意味論は、生成的なレキシコンとして融合可能であることは小野（2005）が示した通りである。

２．研究の目的

（１）生成語彙意味論によるレキシコン研究の推進。生成語彙意味論モデルのクオリア（語彙情報）（Ono 2005, 2007）が事象構造の解釈をどのように決定するかという問題の解決を目指す。

（２）言語における主観性（subjectivity）問題の解明（Horie 2007, Uehara 2006, 上原 2005）。主観性が事象構造の解釈（例えば、心理状態述語など）にどのように影響するか。そして、構文選択にどのように影響するか。

（３）語彙化・文法化における語彙情報と構文の融合についての新たな提案。語彙情報が構文に融合しさらに文法化していく過程には、類型論的に捉えるべき普遍性があることを示す（堀江 2005, ナロック 2005, 2007）。

３．研究の方法

本研究では、まず研究目的に即した具体的な課題の設定を最初に行い、研究代表者を中心に研究分担者がそれぞれの専門性を活かした課題に取り組む。このために初年度は文献調査を徹底して行う。また、海外の先端的な研究動向を知るためにも、国際学会への積極的な参加を進める。次の段階として、具体的に設定した課題解決に向けた言語資料の整備を行う。これには既存の言語コーパスの利用、および新たなコーパス作成も含まれよう。次の段階では、研究の成果を国際的なジャーナルや学会において発信する。このプロジェクトの参加者は、すでに国際会議での発表経験が豊富である。最終段階では、研究テーマに関連する国際シンポジウムを開催し、国内外に研究成果を広くアピールする予定である。そして、その結果を論文集として国内あるいは海外の出版社から刊行する。

４．研究成果

当初の研究実施計画に即して、研究代表者は国内の学会や研究会に参加し、研究テーマについての情報を積極的に集めるとともに、研究者との情報交換を積極的に進めた。平成 21 年度、研究代表者は日本英文学会大会（東京大学、2009 年 5 月開催）のシンポジウムで、「名詞の項選択」と題する発表を行い、研究成果を公開した。

研究グループは、本研究の中心的なテーマである「生成語彙意味論モデル」「主観性・証拠性の問題」「文法化の過程」についての研究状況を広く社会に公開するためワークショップを開催した（2010 年 2 月）。このワークショップで、研究代表者である小野は、「結果構文のタイポロジー」と題する発表を行い、堀江と上原はそれぞれ「認知類型論の観点から見た「主節現象」と「定形性(finiteness)」」、「主観性についての言語対照―認知言語学と類型論のコラボ」と題する発表を行った。これらの発表に対しナロックはコメントを呈し、議論を深めた。このワークショップは今後のプロジェクトの方向性を定めるためにも有益であった。

本研究プロジェクトでは、これまで特に研究の国際化に力を入れたことを強調しておきたい。研究代表者である小野は、韓国（高麗大学）、ベルギー（ゲント大学）、タイ（チュラロンコーン大学）、英国（オクスフォード大学）などで開催された国際学会で研究成果を発表した。また、22 年度には、アリゾナ大学（米国）から研究者を招き、研究課題に関連したワークショップを開催した。このように、国際的な研究交流活動を活発に行い、国際的なレベルでの研究成果の発信を進めた。

研究プロジェクト遂行期間に、研究代表者および分担者は、合計で 35 件の論文を学術雑誌等に発表、また、国内の代表的な学会および国際的な学会において 21 件の口頭発表を行った。さらに小野は単著（編）で論文集を出版し、堀江とナロックはそれぞれ共著で著書を出版した。研究成果を著書の出版とい

う形で社会へ還元することが研究期間中に行われている。図書の出版は５件あった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 35 件）

1. Ono, Naoyuki、Gradability and Two Types of Resultative Predicates、The Linguistic Society of Korea (ed.) The Perspectives of Linguistics in the 21st Centur、査読有、１巻、 2008、259-271

2. 小野尚之、クオリア構造入門、影山太郎編『レキシコンフォーラム 』、査読有、４巻、2008、 265-290

3. 小野尚之、日本語連体修飾への語彙意味論的アプローチ、由本陽子・岸本秀樹編『語彙の意味と文法』、査読有、2009、253-272

4. Horie, Kaoru、Grammaticalization of Nominalizers in Japanese and its Theoretical Implications: A Contrastive Study with Korean、Lopez-Couso, M.J. & E. Seoane (eds.), Rethinking Grammaticali- zation: New Perspective for the Twenty- first Century、John Benjamins、査読有、2008、169-187

5. 堀江薫、金ジョンミン、主観化・間主観化の観点から見た日本語・韓国語の文法現象、『言語』、査読有、37 巻 No.2、2008、84-89

6. Kingkarn Thepkanjana、Satoshi Uehara、Directional verbs as success markers in Thai: Another grammaticalization path、In Anthony V.N. Diller, Jerold A Edmondson and Yongxian Luo (eds.), The Tai-Kadai Languages、査読有、2008、１巻、Routledge、484-506

7. Kingkarn Thepkanjana、Satoshi Uehara、The verb of giving in Thai and Mandarin Chinese as a case of polysemy: A comparative study 、Language Sciences、査読有、2008、30 巻、621-651

8. Nakamoto, Takeshi 、Inalienable possession constructions in French 、Lingua、査読有、2010、120 巻、74-102

9. 金廷珉、堀江薫、「のだ」構文の談話機能に関する対照言語学的考察－韓国語の「KES-ITA」との対比を通じて、『言語学と日本語教育』査読有、2010、6 巻、くろしお出版、175-190

10. Pardeshi, Prashant、Kaoru Horie、Shigeru Sato 、An Anatomy of the Posture Verb ‘barNe‘‘sit’ in Marathi: A Cognitive- Functional Account 、Empirical and Experi- mental Methods in Cognitive/ Functional Research. 査読有、2010、１巻、CSLI、91-108

11. 金普仁、上原聡、韓日語の引用を表す連体形式の対照研究：nun/la-nun と「という」を中心に、『日本言語文化』韓國日本言語文化學會、査読有、第 16 輯、2010、85-105

12. 上原聡、名詞化と名詞性―その意味と形―」『日本語学』（特集「名詞句の文法」）、査読有、29 巻 11 号、2010、24-38

13. Narrog, Heiko、A diachronic dimension in maps of case functions、Linguistic Discovery 査読有、8 巻 1 号, 2010、233-254

14. Narrog, Heiko、What should be on a map? Linguistic Discovery、査読有、8 巻 1 号、2010、96-98

15. Narrog, Heiko、Voice and non-canonical marking in the expression of event-oriented modality – a cross-linguistic study、Linguistic Typology、査読有、14 巻 1 号、 2010、71-126

16. 小野尚之、サテライト・フレーム言語と動詞フレーム言語、藤田耕司、松本マスミ、児玉一宏、谷口一美（編）『最新言語理論を英語教育に活用する』開拓社、査読有、2012、323-335

17. 堀江薫、言語類型論、『日本語学』、11 月臨時増刊号、査読無 2011、76-85

18. Uehara, Satoshi、The socio-cultural moti- vation of referent honorifics in Korean and Japanese 、Klaus-Uwe Panther and Gunter Radden (eds.), Motivation in Grammar and the Lexicon. John Benjamins、査読有、2011、191-211

19. 小野尚之、サテライト・フレーム言語と動詞フレーム言語、藤田耕司、松本マスミ、児玉一宏、谷口一美（編）『最新言語理論

を英語教育に活用する』、開拓社査読有、2011、323-335.

20. Ono, Naoyuki 、Parallels between Motion and Resultative Constructions、Miyamoto Tadao 、Naoyuki Ono, Kingkirn Thepakanjana and Satoshi Uehara. (eds.) Typological Studies of Languages in Thailand and Japan. ひつじ書房、査読有、2012、103-118.

21. 小野尚之、結果構文の意味論.澤田治美（編）『ひつじ意味論講座　構文と意味』ひつじ書房、査読有、2012、89-106.

22. 小野尚之、名詞の項構造：事象モードと関係モード、畠山雄二（編）『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』開拓社、査読有、2012、143-155.

23. Ono, Naoyuki、Event structure and the Japanese indirect passive. James Pustejovsky、Pieretta Bouillon、Hitoshi Isahara 、Kyoko Kanzaki 、and Chungmin Lee (eds.) Advances in Generative Lexicon Theory、Springer. 査読有、2013、311-326.

24. Theeraporn Ratitamkul and Satoshi Uehara 、A contrastive study of pronominal forms in English, Japanese and Thai: A parellel corpus approach. In Miyamoto, Ono, Thepkanjana and Uehara (eds.) Typological Studies on Languages in Thailand and Japan、Hituzi Syobo Publishing、査読有、2012、137-158

25. Satoshi Uehara、The cognitive theory of subjectivity in a cross-linguistic perspec- tive: Zero 1st person pronouns in English, Thai and Japanese. In Miyamoto, Ono, Thepkanjana and Uehara (eds.) Typo- logical Studies on Languages in Thailand and Japan、Hituzi Syobo Publishing、査読有、2012、119-136

26. Robert Sanders and Satoshi Uehara、A syntactic classification of the synchronic use of gěi in Beijing Mandarin: A spoken corpus-based case study of its poly-functionality. Chinese Language and Discourse、査読有、3 巻 2 号、2013、167-199.

27. Horie, Kaoru、The Interactional Origin of Nominal Predicate Structure in Japanese: A Comparative and Historical Pragmatic Perspective 、Journal of Pragmatics 査読有、44 巻 5 号、2012、663-679.

28. Narrog, Heiko and Seongha Rhee、Grammaticalization of Space in Korean and Japanese、Robbeets, Martine & Hubert Cuyckens (eds) Shared Grammaticalization in the Transeura-sian Languages、Benjamins、2013、287-315.

29. Mark Irwin and Narrog, Heiko、Late Middle Japanese、Tranter, Nicolas (ed.) The Languages of Japan and Korea、Routledge、査読有、2013、246-66.

30. Narrog, Heiko、Beyond intersubjectifi-cation: Textual uses of modality and mood in subordinate clauses as part of speech-act orientation、English Text Construction 5 巻 1 号, 査読有、2013、29-52

31. 中本武志　「三つの与格」　『フランス語をとらえる』　三修社　査読有、2013、125-137.

〔学会発表〕（計 21 件）

1. Ono, Naoyuki 、An Ontology-Based Account of Argument Selection in Nominals. The 18th International Congress of Linguists. 2008 年 7 月 24 日 Korea University、韓国ソウル.

2. Ono, Naoyuki、Cross-linguistis patterns of expressing complex events in English and Japanese、 Verb Typologies Re-visited: A Cross-linguistic Reflection on Verbs and Verb Classes、 2009 年 2 月 6 日、University of Ghent、ベルギー、ゲント.

3. Narrog, Heiko 、Asymmetry between positive and negative speech-act modality and the semantic map of the imperative-hortative area 、The 18th International Congress of Linguists. 2008 年 7 月 26 日 Korea University、韓国ソウル.

4. 小野尚之、項構造と事象性、日本英文学会シンポジウム、2009 年 5 月 31 日、 東京

大学

5. Satoshi Uehara、 “The cognitive theory of subjectivity in a cross-linguistic perspec- tive: Pronoun drop in English, Thai and Japanese, or not?” 、Chulalongkorn - Tohoku Cognitive and Typological Linguistics Symposium 、2010 年 8 月 27 日、Chulalongkorn University、タイ、バンコック.

6. Narrog, Heiko 、 Directionality in semantic and syntactic change - the case of modality ACLC Workshop on Gramma- ticalization、 2010 年 11 月 10 日、 Universiteit van Amsterdam、オランダ、アムステルダム.

7. Ono, Naoyuki、Eventiveness and argu- ment selection in nominals、The 6th International Global Wordnet Conference（招待講演）2012. 1. 12、 松江市

8. 堀江薫、Matrix Clause and Sub- ordinate Clause: Bidirectional Ex- tension and Motivating Factors、 第 12 回日本認知言語学会大会、2011. 9. 17、奈良教育大学

9. Heiko Narrog, Seongha Rhee 、Comparative Grammaticalization in Japanese and Korean、Department of Linguistics Talk Series、2011. 12. 16、University of Leuven、ベルギー.

〔図書〕（計 5 件）

1. 小野尚之、 結果構文のタイポロジー、2009 ひつじ書房、総ページ数 487

2. 堀江薫・パルデシ・プラシャント、言語のタイポロジー–認知類型論のアプローチ、研究社、2009、1-135 ページ

3. Heiko Narrog and Bernd Heine、The Oxford Handbook of Grammaticali- zation、2011、Oxford University Press、1-193 ページ

4. Miyamoto, Tadao, Naoyuki Ono, Kingkirn Thepakanjana and Satoshi Uehara. (eds.) Typological Studies of Languages in Thailand and Japan、ひつじ書房、2012. 総ページ数 285

5. Narrog, Heiko、Modality, Subjectivity, and Semantic Change 、A Cross-Linguistic Perspective 、Oxford University Press、2012、総ページ数 319.

６．研究組織

(1)研究代表者

小野 尚之（ONO NAOYUKI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：50214185

(2)研究分担者

堀江　薫（HORIE KAORU）
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授
研究者番号：70181526

上原　聡（UEHARA SATOSHI）
東北大学・高等教育開発推進センター・教授
研究者番号：20292352

Narrog Heiko（NARROG HEIKO）
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：40301925

中本　武志（NAKAMOTO TAKESHI）
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：10292492